

ムーンメモリア・ロストノイズ
二十一話…境界の村

雨和七瀬

王国の北西部に位置するファルコナー領、通称『竜域』。賢竜山とそれに連なる竜翼山脈が嵐を生み続け、その裾野は人だけでなく竜以外の様々な動植物を拒む。

三人が辿り着いたのは、王領グランフィッツと竜域の境に位置する数少ない村、ボード村であった。

「久々に来たが……見慣れない天幕が張られているな」
ルークは村に辿り着いて辺りを見回すと、焦るようにせわしなく動く人々、ひっきりなしに人が出入りする天幕や建物が目についた。しかしそこに統率の取れた様子はない。

「冒険者がほとんどだな、ブランカと同じギルドのブローチを付けてる」

ユノは更に何かを探すようにキョロキョロとして、ブローチを付けていない中年の女性を指さした。

「あのおばちゃんに聞いてみようぜ。おい」

ユノが声を掛けると、婦人は「見ない顔だね」と言いながら三人を見つめたが、ブランカの胸元を見て表情を崩した。

「あら、冒険者さん。タトスさんの依頼よね？ 今村長さんも私も忙しいから、代わりに……居た居た、ライ！ 冒険者さんの相手してくんない？」

婦人は近くを通った少年を呼び止め、こちらに招いた。ライ、と呼ばれた少年は少し嫌そうな顔をしていたが、婦人の「嫌なら畑行きな」という言葉にため息交じりで「わかったよ」と答えた。

「あ……ども、魔物討伐つすよね、そこの俺ん家でセツメーするんで」

言葉少なめに招かれるままに、三人はライの家に向かった。食卓を囲むようにして座ると、ライはルークやユノをチラチラと見ると、ゆつくりと口を開いた。

「兵士さんつすよね、お二人。なんで冒険者の真似事なんてしてんすか」

「すげー、なんで分かったんだ？」
「服」

ライはユノが着ている青い制服を指した。その中身の無い会話を断つべく、ルークは咳払いをして話を始めた。

「……俺達は任務の一環で彼女と行動を共にしている、それだけだ。それよりも討伐依頼の詳細を教えて欲しい」

ルークの聞きようによっては怒りを含んでいるように聞こえる声に、ライは「すみません」と頭を下げながら依頼について話し始めた。

「ここひと月の間、竜域の方から魔物がひっきりなしに來てるんすよ」

「いや、そりやおかしくねえか？ 竜たちが魔物を放っておくわけないだろ？」

ユノが不思議そうに訊くと、ライは表情を険しくし、ブツブツと独り言をつぶやいた。

「だよな……あいつらが魔物を野放しにするわけがねえ……やっぱり、何か……」

「何か思うところがあるんですか？」

ライの曇った表情にブランカは首を傾げる。するとライはハツとして首を横にブンブンと振った。

「いやー別に。土地柄、竜には詳しいってだけっすよ」
少しずれた答え、目を逸らす、乾いた笑みを浮かべる。

何かある、とルークに思わせるには十分であった。ライもルークの視線に気づいて、話を続けた。

「魔物は星降りの荒れ地から一直線に來るんで、西に進んでいけばそのうち魔物とかち合いますよ」

「星降りの荒れ地？ 聞き慣れない名前だ」
ライの顔が青ざめる。何に怯えているのかはルークには分からなかったが、ライの知識が人より多いことは確かであるようだった。

「あー……そう、竜域の調査に來た人たちが言ってたんすよ！ なんだっけ、なんちゃら機関……」

「ザディーナスか？」

「そう、それっす。その人らが魔物を追って居所を見つけて來たんすけど、そのまま討伐してくれるかと思ったのに、別のとこに調査に行っちゃまったんすよ」

（またザディーナスの名を聞いたな。ということは、異物が関係していそうだ）

ルークは手帳に聞いた内容を書いていく。星降りの荒れ地、魔物、異物……そこで手が止まった。

「ライと言ったか。魔物の様子に氣になる点はあるか？」

「氣になる……普段魔物をそうそう見ないんで、あんな禍々しいもんかと驚いたっすね、魔獣のくせして全く刃が通らなかつたし」

ブランカもユノも、真剣な表情でルークの方を見る。思い出したのは、三人とも同じ、清泉の森での一幕だろう。

「……あくまで可能性として、並大抵の冒険者では敵わない魔物である可能性が高い」

「あー……やっぱり」

ライは予想していたような口ぶりであったが、肩を落とす。それを見てユノは励ますようにライの丸まった背を叩いた。

「でも運がいいな！ オレたちならその魔物、倒せるぜ」

ライは背をさすつたが、表情が晴れることはない。むしろより残念そうにしていた。

「……っ、まあそういうことならよろしく頼むっすわ」
ライは三人に頭を下げた。そしてまた小声で愚痴を漏らした。

「……俺は……」

ルークにはほとんど聞き取ることができなかったが、ユノが「なんだよ、そういうのは早く言えよお」とまたライの背を叩く。

「付いて来たいんだってさ。道案内頼もうぜ、ルーク」

「それは……」

ルークは一瞬、ほぼ戦力外であるライを連れて行くことに難色を示したが、ライの言動を振り返り、少し考えるとライに問いかけた。

「お前は竜城の地理に明るいだろうか？」

ライは「あー、その……」と言葉を詰まらせ、目を泳がせていた。その様子を見てユノはあることに気付き、外に聞こえないくらいの声量で話しかけた。

「さてはお前、仕事サボりたいだけだな？」

「ち、違う！ ……少なくとも、今回は」

ライは力強く否定するものの、すぐに語気が弱まってしまう。

「……俺、竜を見るのが好きでよく竜城に行くんすよ。でも毎回畑仕事を抜け出してるから、バレたくなくて……」

……。魔物も竜も俺みたいな無知な奴には危ないってのは百も承知なんで、俺が付いて行くかはおまかせするっす」
ライは震える声で言い終えると、ゆっくりと息を整えた。ルークはライの顔に焦りのような表情を見て、悩みつつも頷いた。

「そうか。なら、こちらとしては同行を願いたい。竜城を徒歩で安全に進む術を知る者は少ないだろうからな」
ライの同行をまっさきに喜んだのは、ライでもユノでもなく、ブランカだった。

「やった！ じゃあ、道中で竜のことについて色々お聞きしたいです！ よろしくお願いします、ライさん！」

ブランカが手を差し出す。ライは少し驚いて仰け反つたものの、「よろしくっす」と手を握り返すと、段々と顔が赤くなつてすぐ手を離れた。

早速一行はライを連れて西へと歩み始めた。高くそびえる竜翼山脈から吹き降ろす風を和らげるものはなく、外套は休むことなく靡き、そして何より……。

「ユノ。髪を結べ。……頼むから」

「纏まる毛量だと思ってるのか？」

ユノの長い髪が風に流されて後ろを歩くルークとブランカに何度も当たっていた。

「村を出る前に何度か試したんですけど……無理でしたね」

髪に完全に埋もれているブランカの声がくぐもって聞こえる。ルークは「昔は結べていただろう」という言葉をグツと抑えて、先頭を歩くライに話しかけた。

「何か使えそうな対策方法は無いか？」

ライは歩きつつも振り返ると、「そうっすねえ……」と顔に指をトントンと当てる仕草を見せた。

「うちの村のおかみさんらは髪が靡くほど伸びたら切っちゃいますからね」

「それもそうかあ……布で巻いとくか？」

ユノは鞆を漁り、髪を纏められる布を探し始めたが、その手はなかなか止まらない。

「ハンカチじゃ足りねえ、もつとこう、広いヤツ……」

そう言って取り出したのは、着替え用の肌着だった。

「お前それ一枚しか持っていないだろう、駄目だ」

「結べつつつたのはルークだろ！？ 良いじゃねえか、オレの服なんだし」

ルークはユノを止めるために服か腕をなんとか掴もうとしたが、上手く躲されてしまい、気が付けばユノの髪は幅広の布で覆われて風が吹いても広がることはなくなっていた。

「ははっ、我ながら良い案だぜ」

ユノは得意げに高笑いする姿に、ブランカは結んだ布を整え、ライが「ユノさんって自由人っすねえ」と感想を述べたことで、ルークは頭を抱えた。

「ま、村に戻ったら被り布でも買うのがおすすめっすね」
「……そうだな」

気を遣って話しかけてきたライに、ルークは力なく答えるので精一杯だった。

一方その頃。男は曇天の中、金属片の転がる灰色の大地を踏みしめる。眼前には男の背丈の倍以上ある中空の金属塊が聳え立つ。

「またこれか。面倒だな……」

そうは言いつつ男は杖を取り出すと、金属塊の表面に杖の先を突き付けた。男は力を込め、金属塊に魔力の線を引いていく。指の皸と同じ程に細かい文様を一周分引き終えると、今度は線と線の間隙に文字を書き足していく。常人であれば読むことが不可能なそれを、男はまるで水の流れのように淀みなく書き進めていく。

最後の一文、その最後の一笔。杖を突き立てると、魔力は光へと姿を変え、ほんの瞬きの間に金属塊を焼き

切った。金属塊は鋭く小さな欠片となり、カラカラと音を立てて地面に落ちていく。

「終わったならこちらを見なさい、魔術師」

男の背後から、少女の声が聞こえる。気が付けば陽が落ちていた。男は瞬きで酷使した目を労わりながら振り返った。

「あなた、魔法陣を描いているときは本当に何も反応しないわね。怒鳴っても蹴っても、まるで動きもしないんだから」

「……『巫女』様でしたか」

男は手に付いた汚れを服の裾で拭くと、巫女と呼んだ少女の前に跪いた。しかし少女の表情は険しくなる。

「首を垂れる前にやる必要があるでしょう。玉座を用意しなさい」

男は立ち上がり、もう一度杖を構える。

「……人使いの荒い」

男の零した文句に、少女の平手が飛んでくるも、男は一步引いて避ける。

「黙って言うこと聞きなさいよ！ まったく、『女王』のお手付きじゃなかったら今頃あなたは私の駒だったのに……」

少女の喚きを聞き流しながら、男は魔法陣を手早く描いていく。魔法陣の円を閉じると、陣の中に周囲の金属

や岩を吸い込まれ、それらが融けるように形を変え、玉座が出来上がった。

「これで仕事もできなければ玩具にできるのに、憎らしいわ」

少女は荒野にぼつんと生み出されたばかりでまだ煙を放つ玉座に手を付く。

「あつ、まだそれ熱……」

男が止める間もなく、玉座に触れた少女の手は燃え上がる。少女は反射的に手を引つ込めたが、少女の手の皮膚は玉座の方に焦げ付いていた。

「……ふん」

少女は狼狽えることも男に怒りをぶつけるでもなく、頭上へ手をかざした。すると雲の一部が消え、黄金に輝く月が顔を出した。その光に照らされ、少女の手の皮膚は砂時計の砂が積みあがっていくように再構築されていく。綺麗に元に戻った手を見てか、その指の隙間から差し込む光を見てか、少女は見惚れるように微笑んだ。

「みんなこれを呪いだと言うけれど、私には祝福のように感じるわ」

少女は懲りずに、いや、躊躇いもせずに灼熱の玉座へ腰かけた。当然ながら、服に火が付き、肉体すら巻き込んで燃え上がる。それでも構わずに少女は口角を吊り上げ、青い瞳を男に向ける。

「『不滅』の力……僭称者を下す為に使わせてもらおうわ」

少女は燃え盛りながら、声高く笑う。

(……こいつは魔女と呼ばれて然るべき女だ、やはり『女王』とはまるで違う)

男は少女だけを照らす月を見上げる。それがいつか、目の前の『巫女』ではなく『女王』の物になることを祈りながら。

〈二十二話へ続く〉